

2日目
第四部

大学教育改革研修 「これからの大手前大学」 -C-PLATSを座標軸に据えて-

Communication

平成23年3月11日(金)
於・シーサイドホテル舞子ビラ神戸



西村 道信 先生

分科会メンバー

- | | | | |
|-----|-------|-------|-------|
| ●教員 | 新垣 円 | 大島 浩英 | 川口 宏海 |
| | 塩田 昌弘 | 四方 啓暉 | 長行 康男 |
| | 西村 道信 | 丹羽 博之 | 平川 大作 |
| | 松原 秀江 | 森 道子 | 寛 雅明 |
| | 山田 信義 | | |
| ●職員 | 浅井 達行 | 奈良 修 | 守屋 祐子 |
| | 大江 俊司 | | |

われわれのグループはコミュニケーションファカルティの分科会報告で、メンバーが四方先生ほか19名のメンバーで話し合いを行いました。一番最初に、コミュニケーションとは何かという話しになるのですが、まず一番最初に自分自身のことから考えたかどうか。自分自身は本当にコミュニ

ケーションがとれていると言えるのかということからイントロとして話に入ります。実は教員間の間であってもコミュニケーションが取れていない場合がある。最初に、表面上はコミュニケーションがとれているように見えても実際のところ本当にはとれていないということが指摘されました。では真のコミュニケーションは何なのかという話になり、そこからずっと展開していくと、学生にコミュニケーションを教えるというより、むしろコミュニケーションの重要性を知ってもらうといったほうがいいのかというように思われます。まずこの定義、到達基準、メソッドを見直してみ、補うところがあれば補い、違うところがあれば考え直してみても良いのではないかと。

定義は非常に適切で、他者と知識、情報、思考、意志、感情等を交換し、共通の理解を深める能力です。43頁に、定義が書かれていますが、44頁には、表・図があります。言語能力と非言語コミュニケーション能力のことが書いてありそれはいいことで、そのあたりは適切なのですが、44頁の図の中には実は非言語能力の中に芸術、音楽も反映すべきでないかと。もちろんこれは一般社会人のコミュニケーション能力、いわゆるそこに特化したものだと思われそうですが、この表は一応それ以外のものもありますよと載せてみても、悪くない。なぜかというと私たちはメディア芸術もあり、そこから非言語のコミュニケーション能力が非常に重要視される。ですからその部分を考えた上でこのところは芸術、ビジュアルな面や音楽なども一応載せても悪くないという意見も出ました。それで本当に意志が伝わっているかどうか。ということは、相手の気持ちを本当に理解できているかにつながると思うのです。だから自分自身が本当に思っていることを相手にきちんと伝えられるかどうか、相手の気持ちもきちんと理解できているか。これができて初めて真のコミ



コミュニケーションができているということになります。

真のコミュニケーションを達成するには、やはり信頼関係が築けないといけない。ですが信頼関係を築くには真のコミュニケーションができないと信頼関係はできない。それが相互作用で、どちらか1つではなくて2つ一緒に育成されていく気がします。いずれにしても真のコミュニケーションをとるには信頼関係が必要で、これがないと昨日の話をうに営業成績などは上がるわけがないので、信用のないところでは物を買ってもらうことなどできないわけで、やはり真のコミュニケーションと信頼関係は非常に密接な関係にあり、どちらも育成していく必要があるという結果になりました。

到達基準なのですが、すべての分野で共通した基準は難しいのではないかと。これは先ほどの発表でも、出て来ていることです。また「最低限の」という表現がここにありますが、最低限とはいったい何だということになってきます。これは就業力と非常に密接に関係し特化している内容かと思うのですが、では就業力というのはメディア芸術のほうでたとえばアニメを描いているのは、就業力やコミュニケーション能力というよりむしろ作品自体が就業力に直結するので、いい作品を描けなければ就業力にならないということなのです。ですから、必ずしも単一の基準では難しいのではないかと、また最低限の基準といっても非常に温度差があるのではないかとという結果が出ました。

そうはいっても一社会人として就業力というよりも企業人のコミュニケーション、というよりむしろ一般社会のコミュニケーション能力が大事なので、ある程度のコミュニケーション能力は全学生に必要と思います。ただどの程度必要かというのはバリエーションが出てくるのではないかと思います。メソッドとしてはいきなり大きなグループで発表させるとコミュニケーションは取りにくいので小さくグループから始めて、徐々に大きなグループに慣れさせるのがいいのではないかと。先ほどでも出ましたが、インタビュープロジェクトというのは昨年度本年度と2回連続全員フレッシュマンセミナーでやっていて、「これけっこういいんじゃない」という意見が出ました。というのはコミュニケーションを取るうえで、実は「日本語表現」がなくなるといったことも関係していて、一番最初に相手の都合に合わせてアポを取るのが当然常識です、そういったものを学ぶべきだとか、アポをとるにはまずはメールで。メールの出し方を通して言語表現のチェックが入ります。ですから今までで総合的にインタビュープロジェクトを通して達成感はあるでしょうし、これは

1. コンピテンシーの共通理解

定義は適切だが、真のコミュニケーションに注意を払う必要がある。
到達基準は再検討すべき。

文意

- 物言と知識・情報、思考、意図、感情等を交換し共通の理解を深める能力という表現は適切。(44pの箇中に引用、言葉なども反映すべき。)
- 信頼関係など、真のコミュニケーションにも注意を払うべき。

到達基準

- すべての分野で共通した基準は作れないのでは、
- 「最低限の」というのが課題が深い。

ポイント

- やグループから広げてゆくと効果的。
- インタビュープロジェクトなどのPBL活動が効果的。

なかなかいいのではないかと意見がけっこう出ました。

そして同年代、社会人と適切なコミュニケーションをとる能力開発のきっかけとして、グループワークを用いることが効果的です。特に男子学生の間ではずっと男子校で女子学生と話をしたいけれど話ができない。実は私の場合はフレッシュマンセミナーの学生もいました。同じクラスで話をしたい子がいるが、自分から話をしにくい。でも話をしたいと相談したきた学生がいました。あみだくじでグループ分けをしたら、たまたま同じグループになったんです。これはうまくいったと思ったらその女子学生をさせて話をしないんです。私もそうなのでよくわかります。その子に仕事をさせて、それから無理やり話をするようにしました。仲良くなったかはわかりませんがそのときは話をしていました。そういったことはありますが、逆に女子の方も女子高で男子と話をする機会がなかったらしい。そのようなこともありますので、同年代でそういう小さなことから始めるといいのではないかと思います。

基本的にきっかけをつくってあげることが大事という意見が多くありました。われわれはきっかけをつくってあげる。そしてきっかけづくりとしてのグループワークの活用。異性と接することができるようにしてあげる。そして社会人、教員、職員と適切に接することができるようにする。教員と話をするとき、中学、高校の延長かもしれませんが、先生と友達みたいなのがいいのだという価値観で、クラブの先輩には敬語を使って先生にはぞんざいな言葉を使ったり。そのような価値観が学生にはあるようで、「先生これやって」とか、試験のときも鉛筆を持っていない。「鉛筆はどうした」「持っていない」「今日試験なのはわかっているだろう。そんな感じで、単語でコミュニケーションする。先輩にはたぶんしな

Ⅲ. 協定必修科目で開設すべき能力と基準

同年代、社会人と適切なコミュニケーションを取る能力開発のきっかけとして、グループワークを用いることが効果的。

きっかけ作りとしてのグループワークの活用

- 同年代、異性との接することができるようになる。
- 社会人(教員、職員)と適切に接することができるようになる。
- グループワークを用いる。

自然なコミュニケーションのためのPBLの導入

- ハイキング、スノーボード、食事をするなどの活動を導入する。

大学の実践スキル開発の必要性

- 発信者、受け手の確認をしたコミュニケーションを促す。
- 携帯電話のメールには、Catch mailメールを書くよう促す。
- メモをとってからメールするよう促す。

Ⅳ. 専門科目におけるPBL型授業への取組

領域科目では限界がある。教室に出て中々距離を入れた授業において指導することが効果的。

少人数の授業での取組

- 原則、グループワーク

社会人と適切なコミュニケーションを取るよう、指導が必要

- 社会人と適切なコミュニケーションを取るよう、指導が必要。
- 社会と接する活動、種別体験などをベースに向上させる。
- アポイントの取り方の指導などで、実践力を養えることが可能。
- 映画館見学、図書館での読書などで実践力を養えることが可能。
- グループで海外の人とコミュニケーションを取る機会を提供する。

専門領域での取組

- プレゼンテーションの指導で、チームワークを育てることが可能。

と思います。社会人、教員職員と適切に接するところからできるようにするのがいいのではないかと思います。それとグループワークが非常に効果を発揮するのではないのでしょうかという意見が多くありました。

それと自然なコミュニケーションのためのPBLの導入ということで、教室内だけではけっこう限界がある。教室だけでなく外に出て、ハイキングだとかスポーツだとか食事とか。ゼミでされている先生もありますが、外へ出るとこれまで取れなかったような上手なコミュニケーションがとれたり、これまで話さなかった子が話したりと、すごい結果が出ていたという報告がありました。ですから外へ出るのも一つの案だと思います。

それから文字の表現スキル開発の必要性ということで、さっき言いましたが、教員のインタビューで発信者、受け手の確認をしたコミュニケーションを促すということはどういうことかといいますと、携帯がこれほど発達しますと、友達同士でだいたいメールのやりとりをしますから、そうしたら名前も言わない相手の名前も言わなくても、当然誰に出し

て誰にいつているかがわかります。それに慣れてしまっただけで先生に何かを確認するときも友達に出す感覚なんです。私の学生もそうでした。「この前の授業休んだんですけど大丈夫でしょうか」と。誰が出したかわからない。個人のメールならわかりません。それで授業中にこれを出したのは誰だと、名前を書けと。そういうことも先生の先ほどのインタビュープロジェクトでそれかなり改善されるのではないのでしょうか。携帯電話のメールもそうなのですが、キャッチミーメールを私の周りでは極力使うように学生にアドレスを出します。これは授業の一環なんだと、個人の携帯電話には出しません。しかし携帯で送られてきます。そのときはキャッチミーメールを見なさい、自分の学校のアドレスを見なさいと。必ずこれを見させる。学校のことや授業のことは学校のメールアドレスに送りますよと、一番最初にも言っていますので。またメモをとってからメールするというのは、先ほどの真のコミュニケーションなのですが、正しいコミュニケーションをとるには重要なことを漏らしてはいけない。大事なことはメモにとってメールに打って確認をして大事なことは漏れていないか確認してからメールを出すようにする。確認をとってからということですから、それから、少人数の授業のときに、先ほども言いましたように少人数のクラスですとレポート出させて添削もでき、グループワークもできますが、大人数の場合は非常に難しいことがあります。少人数のときはこういうことをやらせたいんじゃないかということなんです。

それから社会に出ていき取り組みですけれども、社会人と適切なコミュニケーションがとれるよう指導が必要。やはり言葉づかいやマナーなのです。それと言語以外のコミュニケーション、第一印象も非常に大事ですよという話もする必要があります。それと社会で役立つ活動、成功体験、モチベーション。自分が何かをやってそして成功したこと。それで達成感を持ってもらうとけっこういいと思います。それからアポイントの取り方の指導などで、実践力を育てること。これは社会に出てすぐに役立つことだと思いますので、アポイントの取り方というのも先ほどのインタビュープロジェクトなどで実践力を付けられたら。映画館見学、図書館での読書などでそういうことのきっかけも増やすことができるのではないのでしょうか。課外活動でもけっこうグループごとに話がはずむのではないかとということです。メールで海外の人とのコミュニケーションを取る機会を提供する。これは英語の授業だけじゃない。ネイティブよりむしろインティティブの人とメールをしたほうがいいかもしれません。相手も間違えるか

らしいんだこれと。そしてやりとりするうちにだんだんと英語に慣れていってもらえるのではないかと。これは時間がかかるとは思いますが、英語の授業だけじゃなくて興味ある学生がそのように取り組んでくれたらなあと思います。

芸術の授業での取り組みで、ブレンストーミングやPBLでチームワークを育てることが可能であると。チームワークで何かをするということは非常に多いので、非常に重要な授業になるという指摘でした。もう時間がありませんので、まともに入らせていただくと、1つの科目だけでなくいろんな科目で応用したり、教職員との対応時に疑似体験を行い、実践力を養っていくことが大切。これは少しわかりにくいと思いますので補足説明させていただくと、大学を一つの社会と考える。そして先生や職員を一社会人として社会に出たときと同じ対応をしてもらうということです。

ですからマナーを守って言葉づかいもきちんと社会人としての疑似体験を、大学を一つの社会として疑似体験してもらって。そして大学の職員のなかでも全学的にやるとした場合どういう立場になるんだろうかと、疑問を感じておられた方もいたのですが、それはほとんどと職員の方も学生のマナーの悪いのは当然注意していただき、社会人として対応していただけたらと思います。学生は自分の興味のあることには一生懸命集中するのですが、興味のないことは知らん顔するというのはよく指摘されます。これはどこからくるかというと自分の興味の違いからです。同じメニューで同じ内容で全学生の興味を引くのは非常に難しいことなのではないだろうか。かなり学生にも温度差があるでしょうし、同じ内容でやっても喜ぶ学生もいればそうでない学生もいる。ですから一つのことですべての学生をなんとかしようというのはちょっと無理があるのではという話が出ました。そして最終的にこれらを通してわれわれはコミュニケーションのきっかけづくりを積極的にやっていければいいのではないですか。われわれの使命はむしろコミュニケーションをもつために学生のモチベーションを高めていくためにも、なにかきっかけづくりを積極的に進めていくのがいいのではないということになりました。以上です。

●司会—

ありがとうございました。

どなたか、ございませんか。今の発表に対してご質問、ご意見などお願いします。

では指名させていただきます。守屋室長、補足でもご意見でも。

まとめ

・1つの科目だけでなく、色々な科目で応用したり、大学職員との対応時に疑似体験を行い、実践力を養ってゆくことが大切。

●守屋室長—

今のチームに入れていただいた図書館の守屋です。昨日いろんなご意見や実例を先生がたからうかがい、そのようなことを知らない私は大変勉強になりました。それがあの様にきれいにまとまり、夢のような内容でした。私たちはすごい話しをしたんだとメンバー全員を褒めてあげたいと思います。職員としてどうして接したらいいのかと言ったのは私です。大学での経験はありませんで、職員は企業体の一因として学生をお客さまとして扱うべきなのか、たとえば指導するのかどうかというのか私は明確なものはありませんでした。それでやはり一大人として学生と対する時にそれではだめですよと言いたいときがあって、どうすればいいかと思っていたのですが、それはほとんど一社会人としてまず私たちが恥ずかしくないようにして、学生に接したらいいのだという意見をいただき、これから図書館のほうでもビシビシ本の出し方が悪い、うるさいなどと叱っていきたいと思いますので、先生方も協力ください。

●司会—

ありがとうございました。

